

令和元年度中学校武道授業（合気道）指導法研究事業



授業視察：5 時間目「座り技呼吸法」の練習

令和元年度中学校武道授業（合気道）指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館・（公財）合気会・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕は、令和2年2月15から16日の2日間、日本武道館仮事務所会議室において実施された。今年度も大妻中学高等学校（東京都千代田区）の協力のもと、合気道の授業視察を行い、終了後には授業の振り返りを行った。また、令和4年度に刊行予定の『少年少女武道指導書』の内容の検討も合わせて実施された。

■初日（2月15日）

開講式では、はじめに栗林孝典 合気会渉外部長が主催者挨拶に立ち、「本研究事業は、平成24年度の中学校保健体育科授業における武道必修化に先立ち、平成21年度から実施してきた。しかし、全国における合気道採用校は54校に留まっており、十分な数とはいえない。本研究事業や全国合気道指導者研修会、また、『2019年度武道等指導充実・資質向上支援事業』において、研究授業対象校として活動いただいている各都道府県の13校から様々な資料や情報も寄せていただいているので、それらの研究活動を通して、さらに合気道が皆様に理解いただけるよう努力を重ねていきたい。また、今回は『少年少女武道指導書』の研究にも重点を置きながら、充実した研究討議ができればと考えている」と述べた。

続いて、中島昭博 日本武道館振興課長が「本研究

事業では、大妻中学校での授業視察や全国合気道指導者研修会、またスポーツ庁による武道推進モデル校等の実施を踏まえた振り返りをしていただき、全国の中学生に合気道の素晴らしさを提供できるよう、安全で楽しい合気道授業の研究をお願いしたい」と述べた。

開講式終了後、平野真央研究者の勤務校である大妻中学高等学校に移動し、合気道授業を視察した。この日の授業の対象は中学校1年生41名（見学者3名）で、全8時間中5時間目の授業として「座り技呼吸法」を行った。準備体操と前時までの技の復習の後、まず、座り技呼吸法における受けと取りの動きを別々に練習。その後、平野教諭より、正座で互いに向き合う際には、こぶし一つ分互いの膝を空けることや、受けは掴んだ手首を絶対に離さないことをアドバイスし、実際に生徒同士が相対して行った。互いに技をかけ終わった後、抑えた状態で受けが起き上がれないようにするためには取りの手はどの位置にあれば良いか、なぜ受けは掴んだ手首を離してはいけないかということを生徒に問いかけ、一つ一つの動きに意味があることを気づかせるように導いた。また、この技は力比べではないので、互いの力や流れに素直に従うことを説明し、相手への気遣いや配慮を促した。練習の際には相手を頻繁に変えたり、緑色のマットの中央に赤いマットを敷いて境界線を作ることによって生徒同士がぶつかったり、床板にはみ出して頭をぶつけることのないよう安全面にも配慮した練習方法の工夫が見られた。

視察終了後、日本武道館仮設事務所会議室に移動し、金澤威研究者による司会のもと、授業視察の感想発表と意見交換を行った。

▽鈴木俊雄研究者：手引書通りに展開されていた。相手を頻繁に代えるのは、マンネリ化の防止や技術の均等化につながると感じた。

▽梅津翔研究者：呼吸法は楽しそうであった。受けを転がして起き上がらせないようにするところまでできたのは、やっている方にとっても達成感があったのではないか。また、受け、取り、相対の順で練習したのも良い流れであった。

▽佐藤貴研究者：練習方法の考え方の一つとして、まず、抑えることをやって、起き上がれないところを見せてから転がせても良かったのではないか。



続いて、授業視察も踏まえ、『少年少女武道指導書』の各章の構成案の検討に移った。まず、外部指導者の心構えについて、「授業」における外部指導者と「部活動」における外部指導者の取り扱いについてそれぞれ検討した。授業においては、学校教員とのコミュニケーションを図ることや生徒の実態を理解すること、授業の目的を理解した上で発展的な指導内容を示せるか、学校側の意向を汲み取ること、最終的には体育教員が指導できるように持っていくことが重要ではないかなどの意見が出された。一方、部活動については、生徒の人数に配慮した指導や、活動回数や活動時間など顧問との綿密な打合せの必要性、スポーツ医科学の最低限の知識を兼ね備えているか、文部科学省が出している「運動部活動での指導のガイドライン」に沿った指導ができているかなどが挙げられた。これに対して鈴木研究者からは、外部指導者の制限事項ばかり挙げてしまうと引き受け手がなくなってしまうので、外部指導者だからこそできるメリットも挙げておくことも必要なのではないかとの意見が出された。

午後は、第2章の指導の狙いを検討した後、第3章の基本指導における具体的な内容の検討に移った。ここでは、立木幸敏研究者より、発育発達に応じた資料に基づき、各年齢、学年に応じた指導内容を意識しながら検討していくことが大切ではないかとの意見が出された。その結果、体づくりの運動、受身、後方回転、前方回転、膝行、体捌きなどが挙げられ、前方回転を発展させるための工夫や、体捌きを楽しくやらせるための方法が検討された。また、平野研究者からは、男女共習については、

体力に応じた学習だけでなく、特に女性における年齢特有の二次性徴に伴う体調や身体発達に配慮してほしい旨の発言があった。

■2日目(2月16日)

午前中は、第5章の小学生高学年における指導案の検討を行った。

ここでは、先週、三鷹市の小学校で行われた合気道体験授業を参考に、礼儀や楽しさを感じながら最終的には日本文化に触れてもらうことにつなげていければ良いのではないか。小学校で合気道を採用してもらうことのメリットを全面的に打ち出してはどうか。教員が指導できる範囲も考慮しなければならないのではないかなどの意見が出された後、5時間の授業を想定した構成案を検討した。その結果、1時間目は、日本文化に触れることを第一に礼法(正座や座礼)について話し合いや問いかけを中心に行った後、実際にDVD等を鑑賞させて正しい形や姿勢を確認させる。2時間目は、構えから入り、足捌き(送り足、歩み足)、受身まで行い、転んでも大丈夫ということを体感させる。3時間目は、受身の復習を踏まえた上でボールキャッチなどのゲームを取り入れ、楽しさや興味を引き出す。4時間目は相対で座り呼吸法の投げまで行う。5時間目で学習内容の確認として発表会を行うなどの案が出された。

午後は第6章の中学校部活動における指導について、3校(狭山ヶ丘中学校、武蔵中学校、穎明館中学校)のアンケート結果を参考にしながら年間の指導計画を検討した。

アンケートにも記載の通り、合気道の場合には目に見える勝敗がないため、モチベーションの維持に各校苦慮している。そこで段級審査や全日本演武大会、全日本少年少女武道錬成大会などを組み入れ、テスト期間や夏休み、冬休み、また受験期間なども考慮しながら、各学年の指導内容及び目標設定を検討した。

最後に、各学年における指導の留意点を検討した。中学3年生については、ここで終わるわけではなく、生涯武道として続けていくための動機付けも必要なのではないかという意見も出された。



閉講式では、立木研究者、佐藤研究者、平野研究者より2日間の講評をいただいた後、栗林孝典 合気会渉外部長及び中島昭博日本武道館振興課長より主催者挨拶があり、2日間の研究事業のすべてが終了した。